琉球大学学術リポジトリ

思春期の発達障害児に対する関係形成による発達支援　－事例の変容過程に焦点を当てて－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター
	公開日: 2009-06-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 武田, 喜乃恵, 浦崎, 武, Takeda, Kinoe, Urasaki, Takeshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10808

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要
No.10, 111-127, 2009.

思春期の発達障害児に対する関係形成による発達支援

― 事例の変容過程に焦点を当てて ―

武田　喜乃恵*　　浦崎　　武*

A Case Study of the Development Support Based on their Establishing a Relationship for Pubescent Development Disorder.

— Focusing on Process of the Case —

Kinoe TAKEDA*　Takeshi URASAKI*

ADHD、高機能自閉症などの発達障害のある子どもたちの生きる世界には厳しい現実がある。苦手なことに直面したり、主体性がそがれてしまいがちな現実が目の前にある。

発達障害のある子どもたちの支援は、その子どもの能力を分析的に評価したうえで、弱いところを育てたり、持っている力で弱いところを補ったりする工夫を行うということが一般的なものとなっている。しかしそれはできない自分と向き合う状況を作ることでもあり、浜田（1997）が指摘するように今のこの子のありのままを否定してしまうことにもなりかねず、子どもたちを追い込んでしまう危険性をはらんでいる。特に思春期の発達障害のある子どもの場合、自信のなさや自尊心の低さが目立つが、思春期の発達を支える家族以外の他者となる友人とうまく関係を形成することができないために、自尊心の低さを修復することが難しい。思春期において関係形成による支援を通して、自尊心を育てていくことや子どもたちのありのままを受け止め、支えていく他者の存在は重要となる。

そこで本研究では、思春期に焦点を当てた発達障害児に対する関係形成による発達支援を通して２事例の変容過程を明らかにし、その変容の要因について考察することを目的とした。その結果、遊びを通して関係性を深めていく中で、他者理解の力が育ち、関係性を支えに自ら苦手なことに挑戦するようになる姿がみられた。子どもたちが意欲的になれることや遊びを通して関係性を深めていくことの重要性が示唆された。

１．はじめに

ADHD、高機能自閉症などの発達障害のある子どもたちの生きる世界には厳しい現実がある。苦手なことに直面したり、主体性がそがれてしまいがちな現実が目の前にある。村瀬（2007）は、支援を必要とする子どもたちが世界や自分をどのように受け止めているかについて以下のように述べている。主体性を持つことが難しいということは、能動的でありうる状況が限定されているということであり、人としての自尊心、自信を持つことにブレーキをかける要因であること、自分と周りの世界は何故かかみ合わない、気がついてみれば失敗しているという不本意な結果が生じているという経験に常に曝されていること、本人にとっては楽しいと経験される行為がそのまま容認されることが少ないこと、そして「そのままで、存在自体をよし」として、無条件で受け止められるという経験を十分にしているのであろうかと疑問を投げかけ、それは生きる希望と努力を継続するための基盤であると述べている。

*Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

発達障害のある子どもたちの支援は、その子どもの能力を分析的に評価したうえで、弱いところを育てたり、持っている力で弱いところを補ったりする工夫を行うということが一般的なものとなっているようである。弱いところに焦点を当てて支援を行うということは、子どもたちができない自分と向き合う状況を作ることでもあり、浜田（1997）が指摘するように今のこの子のありのままを否定してしまうことにもなりかねず、子どもたちを追い込んでしまう危険性もはらんでいる。村瀬（2007）や浜田（1997）が指摘するような世界を生きる発達障害のある子どもたちの場合、その子どもの個体能力に焦点を当てた支援だけではなく、関係性に焦点を当てた支援が有効となる場合がある。

思春期のアスペルガー症候群や学習障害などの発達の気になる子どもの場合、マイナスの自分を意識にのぼらせることがあり、頑張れない自分という自己認識をもって自分で自分のことを責めてしまうことも少なくない（別府，2002）。このように思春期の発達障害のある子どもは自信のなさや自尊心の低さが目立つ上に、思春期の発達を支える家族以外の他者となる友人とうまく関係を形成することができないことが、自尊心の低さを修復することを難しくしている。思春期において関係形成による支援を通して、自尊心を育てていくことや子どもたちのありのままを受け止め、支えていく他者の存在は重要となってくる。

関係性に焦点を当てた発達臨床的援助において、小林（2008）は、養育者によって育てられる時、最初に生まれる両者の間のかかわり合いは、気持ちの動きを基盤にして深まっていくという厳然たる事実に発しているとし、発達の最初の形、つまり原初の形を大切にしながら、それに積み重ねるようにして発達支援を考えていくことが関係発達臨床の基本に流れていると述べている。また、山上（2003）は、生活世界とは何よりも他者と共に在る世界であり、他者と共に生き、他者に気づき、かかわりが育つことが、自己形成につながるという発達変容の視点なくして自閉症の援助法は成り立たないと述べている。自閉症に限らず、人にとっての生活世界がそうであるならば、思春期の発達障害のある子どもたちの支援においてもそのような発達変容の視点を持って支援を行うことは重要であると思われる。しかし、そのような支援による変容過程について検討された研究は少ない。

以上のような視点に立ち、筆者はADHDと診断された小学５年生男子（以下、Ａ君）と自閉傾向のある小学５年生男子（以下、Ｂ君）とかかわる機会を得た。２事例とも学習面の困難さに加えて、対人関係の問題を持ち合わせており、関係性に焦点を当てた発達支援の必要性があると思われた。

浜田（2006）は、発達の大原則として、手持ちの力を使い、今のできなさを引き受けて、なんとかやりくりしながら、自分の最大限をそのつど生きていくなかで初めて、その次の力は伸びてくる、と述べ、発達を目標とせず、あくまでも結果とした。そして、「力を使って単独個体で生きる」にとどまらず、「ともに生き、共有の生活世界を立ち上げる」という共同のありようこそが発達の原則にかなったことと述べている。ここでは、浜田（2006）が述べる発達の大原則に従い、「ともに生き、共有の世界を立ち上げる」ための他者との関係形成による発達支援を支援方針とする。

そこで本研究では、思春期に焦点を当てて発達障害児に対する関係形成による発達支援を通して２事例の変容過程を明らかにし、その変容の要因について考察することを目的とする。

２．方法

(1)　事例の概要

事例１

クライエント：来談時10歳（小学５年生）の男子、Ａ君。

主訴：学習の際「どうせできない」とあきらめ、取り組まないことや友達とのトラブルがありカッとなって手や口が出る。

生育歴及び問題歴：父親・母親・弟・妹の5人家族で育つ。幼い頃から知らない人に会っても声をかけるような明るくておしゃべりでいつもニコニコとしている子どもだった。昔から不器用で、４歳頃になると周りの子どもたちはブロックで上手に作品を作ることができるようになるが、Ａ君はとても苦手だった。マイペースに人と関わり、言

いたいことをストレートに言うＡ君は、いじめの対象となった（小１）。課題ができないことが目立つようになり、母親は担任から指摘を受けた（小２）。小４の１年間は特に友達とのけんかが絶えず、休み時間の度にトラブルがあった。小４の３月、Ａ君は「作文が書けない」「工作ができない」など課題をこなせずに悩んでいた。学校で友達に「死にたい」と発言したことが母親に伝わった。小５の６月、病院でADHDと診断される。小５の７月より支援を開始することとなる。

事例２

クライエント：来談時11歳（小学５年生）の男子、Ｂ君。

主訴：対人関係のトラブルがあり、友達に手を出すことがある。学校での取り組みがうまくいかないことがある。

生育歴および問題歴：父親・母親・妹２人の５人家族で育つ。幼い頃はだれかれ構わずに話しかけた。母親の友達にも自分の友達のように話しかけるので、母親は人前に連れて行くことを少し避けることもあった。特別支援学級に在籍。おしゃべりだけど、作業や書くこと勉強みたいなことが苦手。学校でも話がずれることがあり取り組みがうまくいかないことがある。友達とのトラブルが頻発し、友達に手を出すこともあり学校から指摘を受けた（小５）。友達を誘ったりして友達を求めてはいるが、学校の中で周りの友達に「Ｂ君とは遊ばない方がいいよ」と言われていて、Ｂ君は気にし始めているが、どうしてそう言われているのか理由がわからない。月曜日には学校に行きたがらないことがあり、そのときは母親も無理に学校へは行かせることはしていない。小５の11月より支援を開始することとなる。

⑵　経過の記録と考察

事例１においてはＡ君が小５のＸ年７月から小６のＸ＋１年７月までの以下の３種類の資料を扱うこととする。①筆者が支援（P.R.において週１回50分）終了後にエピソードを中心に記述した関わりの記録、②母親からの聞き取りによる記録、③学校の担任の教諭及び特別支援教育コーディネーターからの聞き取りによる記録。

事例２においてはＢ君が小５のＹ年11月からＹ＋１年12月までの以下の３種類の資料を扱うこととする。①筆者が支援（P.R.において週１回50分）終了後にエピソードを中心に記述した関わりの記録、②母親からの聞き取りによる記録、③学校の担任の教諭からの聞き取りによる記録。

それぞれの事例において①の資料を時期区分に分け、その時期区分に合わせて②、③の資料を扱い、考察することとする。表１に事例１と事例２の変容過程を示す。

３．経過と考察

⑴　事例１の経過

第１期　遊びを共有するする他者として受け入れられ遊びに夢中になる時期

（＃1～13　X年７月26日～11月２日）

母親と離れるとき「お母さんとは別なんだ～」と不安を感じさせる発言もみられたけれど、P.R.に入るとそんなものは一気にどこかへ行ってしまったかのようにＡ君がトランポリンに乗って飛び跳ね始めた。私がそれを見ていると、「先生もやっていいよ」と言い、私も一緒に飛び跳ねる。一緒に遊ぶ友達という感覚を持って臨んでいた私は“先生”と呼ばれたことに違和感を持った。Ａ君は人見知りがなくて、初めて一緒に遊ぶとは思えないくらい遊びモード全快だった。受身の関わりではなく、遊びをリードしていた。サッカーでは「キーパーやっていたから」と得意なことをしたり、遊ぶ感覚を取り戻しながら、手加減しながらぎこちなく遊ぶ私に「Ａのボール取っていいんだよ」「ぶつかったりしてもいいんだよ」とアドバイスをしたり、フライの蹴り方を教えてくれたりした。Ａ君がトランポリンで飛び跳ね始める。そして「先生好きなのやっていいよ」と言い、私は別々で遊ぶということに内心戸惑いながらも遊ぶものを探しているとＡ君が思い出したかのように「あっ！バトミントンやろー！」と言って卓球をすることになった。バトミントンでのＡ君はプロのスポーツ選手を思わせるようなとっても真剣な表情で、さっきまでのＡ君はどこかに行ってしまったみたいだった。本当の試合をしているようにかけ声もかけていて、圧倒される感じがした。Ａ君

があまりにも夢中になってバトミントンをしていたので終わりの時間であることを言い出すことができずにいた。お母さんたちが呼びに来たがA君はそれにも動じずに続ける。試合は３－１でA君が勝ち、終わったら握手を求められたので、握手をした。帰りはに次回は将棋をする約束をして帰った。

＃２では「将棋やろー！」と張り切っていた。私が勝てるときが何回かあって勝ちたかったけれど、A君が勝つようにしようと思っていた。40分におよぶ戦いの末にA君が勝ち、「よっしゃー!!勝った～!!」と喜んでいた。ブランコに乗ったときのこと。A君との距離も近くて、親しみを感じながらおしゃべりをたくさんした。ここの大学に入りたいけど「頭悪いから」無理かもと思っていることや夏休み宿題がいっぱいでて嫌なこと、もっと遊びたいことなどを話してくれた。私はA君の話を聞いていろいろなことを思った。「頭悪い」ってなんだろうってことや学校の勉強の良し悪しだけにとらわれないでほしいなぁということ、それから宿題も大切だけれど、それよりも遊ぶことが子どもの仕事だと思うから、A君がたくさん遊べたらいいなあと思った。外で思いっきり走って鬼ごっこをすることとか、友達と原っぱに行って虫取りをすることとか、サッカーや野球をすることとか、そういうことはどんどん減っていくと思うから、大切にしてほしいなあと思った。そしてA君が「もし戻れるならお母さんのお腹の中に戻りたい」と言い、私はとてもびっくりして目を丸くした。＜どうして？＞と理由を尋ねると、小さいときが一番遊べて、お母さんのお腹の中から始められたら、一番たくさん遊べるからと話してくれた。私もその気持ちがよくわかるなぁと思った。ブランコから降りた後に、「先生遊ぶの好き？」とちょっと不安そうにA君が聞いた。＜先生遊ぶの好きだよ～＞と言うと「良かった～。大人の人とか遊ぶの好きじゃない人とかいるから…」と安心したように言っていた。

＃３では、行く途中でA君に会った。「あっ!!先生!!」とA君が声をかけてきた。A君はとってもワクワクしているようだった。P.R.に入るとA君が「今日何して遊ぶ～？」と私に尋ねた。私は＜何する～？＞と返した。A君はサッカーボールを蹴りながらしばらくおしゃべりをした。離島に遊びに行ってジェットスキーに乗った話やバイクの免許の次にジェットスキーの免許を取りたいことなどを話していた。バレーボールをしたときに、バレーボールを題材にしたドラマに出ている女優の話になり、「あの人彼氏いるかな？」とA君。＜どうかなぁ＞と言うと、「いるはずね」と言う。＜A君は好きな人いないの？＞と聞くと、「う～ん。いない」と言った。その後すぐに「俺のこと好きな人とかいないと思う」と言っていた。またこの時期A君はお母さんの面接が長引くと必ず「よっしゃー！」と、とっても喜んでダッシュでP.R.へ走って行った。延長にならなかったときも「もっと長く遊べるかと思ったよね？」と私に聞いたり、「あぁ～」と嘆いて残念そうにしていたり、そんなA君の姿を見ているとここで遊ぶことが本当に楽しいんだなあと私も嬉しい気持ちになった。

第１期の母親からの聞き取り

８月：「俺はこんなに楽しくていいのか」と話す。
10月：P.R.に行った日は「ぐっすり眠れる」と話す。

第２期　攻撃的な面を向けてくる時期
（＃14～18　X年11月7日～12月13日）

＃14では、ミニカーで遊んだときに、電池がないと下に滑って行った車が上まで戻ってこないことを知って「せこ～い。そんなときは…」と言って近くにあったサッカーボールを思いっきり壁に蹴っていた。私はA君がいつでも自分を出せるように否定も肯定も出さないようにそれを見ていた。ブランコに乗っていたときに、スターウォーズに出てくるソードに似たものを棚から発見して、私に向かって敵をやっつけるみたいに剣を振り回した。素材がスポンジだったから痛くはなかったけれど少しびっくりした。そしていつの間にかブランコでちゃんばらが始まった。A君は攻撃中心で、私は防御中心だった。何も持っていないのは明らかに不利だと思って、棚に手を伸ばし武器になるようなものを２つ取った。でも全然使い物にならなくて途中で１つは落ちてしまい泣きそうな気持ちになってくる。でも何とか楽しく遊ばなきゃと

思って頑張っていた。しばらくそうしていると先生とお母さんが迎えに来て、攻撃をやめるかなぁと思ったけれど、かまわずに続けていて気にしていない様子だった。＃16では、サッカーを試合形式でやったときに、私におかまいなしでどんどん得点を決めていた。私は頑張って楽しもうと思ったけれど、ほとんどボールをさわらせてもらえなくて、１点を決めるのがやっとだった。11点になって「はい、おわり～」と言って試合が終わる。いじめられっ子の気分だった。私が残念な顔をしているとＡ君がとても心配そうな表情で私の顔を覗き込んだ。＃17では、バトミントンの試合を始めてあまり時間がたたないうちに「先生、コース変わってないよ。コース変わってないと打たれるよ」と少しきつい感じで言う。前からＡ君に言われていたことだったけど、それを意識することをすっかり忘れていた私は、直球で言われたその言葉に苦しくなった。＜頑張って変えるね＞と気持ちを切り替えるようにして言った。

第２期の母親、担任からの聞き取り

11月：学校でトラブルなどもなく安定してきていると担任が話す。

第３期　２人の関係が深まりを見せる時期

（＃19～27　X年12月19日～X＋１年２月21日）

＃19ではクリスマスプレゼントを用意していた。P.R.も電球で飾り付けした。クリスマスプレゼントを渡すことになったのは、Ａ君がサンタさんを信じていたからだ。クリスマスの話になり私が＜クリスマス何買ってもらうの？＞と聞くと、Ａ君が「買ってもらうんじゃないよ。サンタさんからもらうんだよ」と言った。とても真剣で、私はそれにハッとさせられた。そしてＡ君の中にある生き生きとしたサンタさんの世界のことを思った。物を渡すことに抵抗する気持ちもあったけれど、私はプレゼントに気持ちを込めようと思った。P.R.に向かいながらＡ君がどんな反応をするかなぁとドキドキしていた。私がドアをあけると、飾り付けを見て「これ先生がやったの？」とP.R.へ入って行く。いつもと違う調子でいろんなことをしゃべっていた。タイミングを見計らって＜メリークリスマス＞とプレゼントを手渡した。Ａ君はかしこまって「ありがとうございます」と受け取った。「先生どこで買ったの？」「先生これ自分で包んだの？」とたくさん質問をしていた。そのあとサッカーボールを蹴りながらおしゃべりをしたときのことだった。P.R.には今は使われていない古びたビデオカメラが取り付けてあるのだけれど、「これ監視カメラ？映るの？」と初めてこのカメラについてＡ君が触れた。そしてカメラにボールをぶつけ始めた。それを見ていた私は何かＡ君との間に隔ててあった壁のようなものをＡ君が壊しているように感じた。＃20ではP.R.に向かう途中、秘密の話をするようにサンタさんからのプレゼントのことを目をキラキラさせて話していた。プレゼントはスターウォーズのゲームのカセットでその話をとっても嬉しそうにしていた。＃22ではその日がＡ君の誕生日で私は誕生日ケーキを作って用意していた。P.R.に向かう途中、Ａ君が「今日ゲーム持ってきた」と言い、サンタさんからもらったスターウォーズのゲームの話を夢中でしていた。それからP.R.で誕生日会をした。クリスマスプレゼントをあげたときのようにたくさんしゃべっていた。その後スターウォーズのゲームをした。始めのほうは私も少しやったけれど、それ以降はＡ君がほとんどやっていて、途中「先生ちょっと待ってね。待つの嫌でしょ？ごめんね。」と私のことを気にかけていた。この日のバトミントンで初めて私が勝った。とっても嬉しくて本気で喜んだが、そのときＡ君は何ともいえないような泣きそうというか真剣な表情で一点を見つめていた。Ａ君のバトミントンに対する自信を傷つけてしまったのではないかと心配になったけれど、次の試合では「借りを返す」と気合が入っていてストレートでＡ君が勝った。＃26ではバレンタインのチョコを作ってＡ君にプレゼントした。「昨日もらえなかったから」と嬉しそうだった。学校で机に入っていないか何度も確かめた話をおもしろおかしく話していた。＃３で「オレのこと好きな人いないと思う」と言っていたＡ君を思うとこの行動は大きな変化だと思った。

第３期の母親、担任からの聞き取り

12月：筆者からもらったクリスマスカードを家に帰って何度も読み返していた。

母親に「障害で良かった」と言う。理由を尋ねると「障害じゃなかったら武田さんと出会えなかったから」と話す。

病院の検査でてんかんであることがわかる。

1月：病院での検査結果が良好だった。母親に「もう障害じゃないの？」と聞きP.R.にこれなくなるのではないかと心配する。

宿題を頑張れるようになった。P.R.に来る日は休み時間に学校で宿題を終わらせてくる。

仲良しの友達C君と遊ぶ約束をしたが、A君が寝坊してC君は出かけてしまって遊べなかった。次の日学校へ行くとC君が他の子と遊んでいたことを知ったA君。前なら不機嫌になって口が出たり、手が出たりすることが多かったけど耐えられるようになった。

第4期　P.R. 以外の場でも関係性を必要とする時期

（#28～35　X＋1年3月1日～5月9日）

#28ではとても印象に残ったことがあった。A君が私に新しいサーブのうち方を教えてくれたときのこと。「こんなって打てる?」と見本を見せてくれて、私が＜こんな?＞とラケットを振る。私はする前から「できない」と思ってしまい余計にできなくなる。自信がなさそうにやっている私にA君は「できてる、できてる」「もう少し」と私の気持ちに寄りそうように声をかけて練習に付き合ってくれた。まだできないとき、下手なときに『それでいいよ』って教えてもらったこと今までなかったなあって涙が出そうになった。A君ありがとうと思った。#29ではおしゃべりをしていたとき「先生のお家に行ってみたい」とA君が言った。私は＜きれいにしたら今度おいで～＞と言った。後で安易においでと言ってしまったと後悔した。#33では、「先生部屋片付いた?」と聞いてきた。私は寮だから男子は入れないことを話した。「小学生でも?」と残念そう。「先生Aのお家来て～」と、とても来てほしそうだった。行っていいのかなぁと思いながら＜そうだね～。A君のお家行ってみたいなぁ＞と私は言った。それから「お姉ちゃんってどんな?」と聞いた。そして「オレお姉ちゃんほしい」「弟だとケンカばっかりするし。お姉ちゃんとかだったらご飯とか作ってくれるし」と言う。#35ではバトミントンをやっているとだんだん適当になってきて楽しくなさそうだった。途中で「宿題やってないから気が重い」と言っていて私のせいで楽しくなくなっているわけじゃないんだと安心した。でも何とも言えないような威圧感でレベルの高い要求をしてきて私は少し嫌になってしまった。まだそこまでできないと思った。けれども振り返ってみてこの気持ちはA君が普段感じている気持ちかもしれないと思った。

第4期の母親、担任からの聞き取り

3月：病院でてんかんの検査をしたが、あまり状態が変わっておらず、てんかんの薬を増した。

4月：6年生に進級。クラス替え。仲良しの友達とクラスが一緒で先生も優しくA君は新しいクラスが気に入っている。

第5期　関係性を支えに苦手なことに挑戦する時期

（#36～41　X＋1年5月16日～6月17日）

#36では「今日体育でマット運動やった。マット運動やろう」とはりきっていた。学校で上手くできたことや楽しかったことをP.R.でよくすることがあったからマット運動得意なのかなぁと思っていたけれど、得意というわけではなくて、学校の友達で倒立ができる人がいてそれをやりたかったようだった。その子のまねをA君がやったけど倒立には程遠く、ほぼ前回り。でも勢いがあった。壁倒立、三点倒立もやった。私は大学の授業でマット運動をとっていたのである程度自信があったけど、A君がオレできないしと思うのではないかと思って自信を出さないようにやった。三点倒立を私が成功させると「先生すごーい」と言ってA君もやる。1回やってすぐにやめてしまった。練習するの苦手そうだなぁと思った。しばらく違う技をやっていたけれどまた三点倒立を始める。教えられたりするの嫌いかなぁと思ってA君のやっているのを側で見ていると「先生どうやってやるの?教えて」と言ってきた。私はやりながら＜ゆっくり足を上げていってお腹に力を入れてやってるよ。

足の位置も前がいいよ＞とアドバイスした。Ａ君は早速やって「あ、今のでなんとなく感覚わかった!」と嬉しそうに練習をする。見ていて覚えが早いなぁと思った。教えられることが嫌いというわけではなさそうだったので私はＡ君の身体を支えた。何回かそうやっていると「先生がおさえてたら、おさえてるからできるんじゃない?」と言う。当たり前のことをなんで聞いたのかなと思っていると、「じゃあ、手離したほうがいいんじゃない?」と言った。自力でできるようになりたかったんだと思った。手を離しても上達が早くてどんどん上手くなっていく。やりたい！と思ったことに対する吸収力がすごいと思った。Ａ君が手ごたえを感じてできたときに「今の何点だった？」と私に聞き、正直に＜う～ん、70点＞と言った。するとＡ君が「えっ？それだけ？」と言う。私はＡ君の「できた！」という気持ちを台無しにしてしまったのではないかと心配になったけれど、その後のＡ君の集中力と気合いはものすごくて、私の言葉をばねに満点の倒立をやってのけた。＃37では気が重そうだったけれど学校の宿題を自ら持って来た。最初にバトミントンから始めた。結構長い時間卓球をしていたけれど、Ａ君が宿題やろうと言うのを待った。宿題は公倍数の問題だった。ただ計算するところはできるけれど、文章問題が嫌いと話していた。最初の四問は文章問題だった。読んでも自分で意味を理解できていなくて、私が絵や図を書いて説明して、それから一緒に考えていった。答えを「45！」と言っていたのに数秒後に違う数字を書いていたときはびっくりした。＜さっき45って言ってたよ＞と言うと「そうだった？」という表情で書き直した。計算問題は結構できていて、「そろばんやっていたから」と得意そう。文章問題よりもずっとスムーズに進んでいた。「先生とやると勉強楽しいけど、他だと…」と言っていた。＃39、＃40では、レゴブロックのロボット（図１）作りをした。レゴブロックはずっと置いてあったけど初めて興味を示したので、どうして今日は興味を示したのだろうと思った。結構細かい部品が多いから作業も細かいしＡ君すぐやめてしまうのではないかと思ったけれど、「ロボットかっこいい」ととても意欲的に取り組んでいて、意外な感じがした。私は主に部品を探して渡したり、どんなふうつけるか困っているときに教えたりしながら、Ａ君がやりたいようにできるように見守るようにしていた。＃40では私の作ったロボットとＡ君のロボットで戦いを始めた。私はＡ君の世界を壊さないよう見守るように見ていた。最後にロボットたちはゴミ処理場に行き戦い、どちらが勝つということなく戦いが終わった。

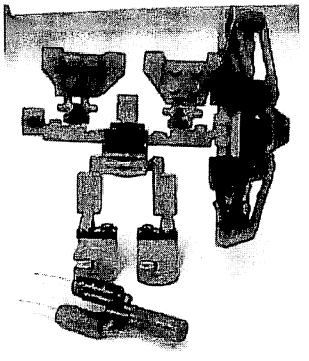

図１　Ａ君が作ったロボット

第５期の母親、担任からの聞き取り

５月：P.R.で練習してできるようになった三点頭立を学校の体育の授業でも成功させ、Ａ君の自信となった。
P.R.で筆者と宿題を一緒にしたことで「俺は塾に行って勉強する」と勉強に対してやる気が出る。

６月：低学年のときにＡ君をいじめていた友だちとＡ君が一緒に遊ぶようになる。母親に「大丈夫。意地悪なんかしないよ。仲良しになったよ」と話す。
学校のテストは今までは先生に教えてもらうことがあってＡ君はそれが嬉しかった。でも最近自分の力でやってみたいという意欲が出てきた。

第６期　苦しい胸のうちを語る時期

（＃42～45　Ｘ＋１年６月24日～７月24日）

＃41では学校でお腹が痛くなった話をする。ここ３日間くらいずっとお腹が痛くて、学校でも保健室に行ったり、授業中も寝ていたりしたと話していた。私はそれを聞いて精神的なものからきているお腹の痛さじゃないかなぁと思った。翌週はＡ君がインフルエンザにかかってしまったためお

休みとなった。＃42では、Ａ君がトランポリンの上でねっころがり、天井をボーっと見ていた。私は隣で同じように天井を見る。インフルエンザにかかってしまったために来年から通うかもしれない中学校の見学に行けなかったことを話していた。そして「先生、Ａがここに来れなくなったらどうする？」と聞いた。＜来れなくなるの？＞と聞くと「う～ん、わからん」と言った。中学校の進路の関係で来れなくなるかもしれないのかなと思った。

＃45で夏休みの話をしたときのこと。Ａ君は宿題がたくさん出て嫌だと嘆いていた。「先生宿題全部やって」「先生脳みそ取り替えて」と本当に嫌だということを私に訴えていた。私は辛いんだなぁと何ができるかなぁと思いながらうなずいて聞いていた。「先生とまたここで一緒にやろうか？」と言ったけれどＡ君は無言だった。「でも先生、Ａと脳みそ取り替えたら大変だよ。小学校１年生とかの勉強とか。」そして「地獄だよ」とＡ君が言った。Ａ君にとって宿題はとてつもなく大変なものだということを思った。「皆にとっては宿題は大変じゃない。俺とかは頭悪いからすごい時間かかる」と言う。この宿題はどれくらい本当にＡ君のためになるんだろうと思った。＜先生も夏休み最後の日くらいに宿題たまってた＞と言うと「Ａはやってもできなくてたまる。時間がかかるから」と言った。それを聞いて私のできてもためてしまうのとはわけが違うんだなあ、Ａ君はもっともっともっと苦しいんだと思った。

⑵　事例１の考察

第１期＃１から、Ａ君は受け身の関わりではなく、遊びをリードしていた。筆者はそのリードに合わせるように関わった。別々に遊ぶことを提案することもあり、筆者との関係性の薄さを感じさせる発言もみられたが、その後、Ａ君が最も得意としているバトミントンを筆者と共に夢中になってしたことをきっかけに、次回は将棋をしようと約束をして帰った。そして＃２でははりきって一緒に将棋をしたり、２人でブランコに乗りながら「もっと遊びたい」こと、「お母さんのお腹の中に戻りたい」ことを筆者に語ったり、「先生遊ぶの好き？」と筆者に確認したりと、＃２の段階で筆者がＡ君にとって遊びを共有したい他者となっていることがわかる。「死にたい」と思っていたＡ君の「お母さんのお腹の中に戻りたい」という気持ちは、Ａ君の生きている現実がそれほどまでに苦しいという心の叫びのように思われた。

浜田（2006）は、人間は自分の力を使って自分の利益になることが嬉しいだけでなく、自分の力で人を喜ばせて喜ぶ生き物であると述べ、相手を喜ばせる機会や体験を、いまの子どもたちはどれくらい味わっているだろうかと疑問を投げかけている。Ａ君はP.R.ではアドバイスをしたり、バトミントンを教えたり、将棋で勝ったり、できる自分を思いっきり体験しているようであった。そしてＡ君がバトミントンを教えることで、筆者は目に見えて卓球がうまくなっていった。Ａ君が家庭や学校では教えられたり、アドバイスされたりすることが多い中で、そういう体験を積み重ねていくことがＡ君の喜びや自信になっていったと思われる。

第２期では、筆者に向かって敵をやっつけるみたいに剣を振り回したり（＃14）、サッカーでは筆者におかまいなしにどんどん得点を決めたりした（＃16）。筆者の受け身の関わりがＡ君の攻撃性を引きだした側面があると思われた。鯨岡（2005）は、主体として生きることに含まれる両義性について、「私が一個の主体であるようにあなたも一個の主体であることを、相互に認め合うことができなければならない」と述べている。Ａ君が主体となるためには筆者も主体となることが必要不可欠であったと思われた。

第３期では、筆者とクリスマスプレゼントを渡したり（＃19）、誕生日会を一緒にしたり（＃22）、Ａ君が筆者に大切にされる体験をすることで、Ａ君が「障害で良かった。筆者と出会えてよかった」と筆者の気持ちを受けとってくれたことの現れた発言であると思われた。また、＃３で、「俺のこと好きな人とかいないと思う」と自己否定的だったＡ君が、＃26ではバレンタインデーの日に学校で机の中にチョコが入っていないか何度も確認した話をしており、何度も確認するということは自分のことを好きな人がいるかもしれないと思っての行動であり、自己肯定感の高まりが感じられた。第４期では、「先生のお家に行ってみたい」（＃29）、「先生Ａのお家に来て」「お姉ちゃんがほしい」

（＃33）と筆者との関係性をP.R.以外の場でも必要とすることが多く、Ａ君にとって筆者はそれほどまでに必要な存在であることがうかがえた。＃28で、筆者に上手に卓球のサーブを教える体験をしていることも重要であったと思われる。それは、一生懸命教わろうとする筆者の姿勢に支えられており、そのことが、第５期に筆者に三点頭立を教わるということ（＃36）へ繋がっていったのだと思われた。筆者に三点頭立を教わり、根気よく練習し三点頭立ができるようになったＡ君は、学校の体育の授業でも三点頭立を成功させ、友達に羨ましがられる。できない自分を人前にさらすことの多かったＡ君が、自分の力でできるようになった三点頭立を披露し、友だちに羨ましがられる体験はＡ君の大きな自信となったようだった。そして、＃37では宿題を持ちこみより現実適応に向かって行きます。

第６期＃45では「みんなにとって簡単なことが自分にとっては難しい」という他者理解に基づく自己理解を語る。Ａ君が他者理解の力を伸ばし、より自己を相対化して語っていることが伺える。遊びや意欲的になれることを他者と共有する体験の積み重ねが、他者理解の力を伸ばし、その他者を支えに苦手なことに挑戦することに繋がっていったと思われた。

⑶　事例２の経過

第１期　関係性が不安定な時期

（＃1～12　Ｙ年11月８日～Ｙ＋１年２月11日）

私が部屋に入っていくと、Ｂ君はおもちゃで遊んでいた。母親担当者が、「お姉さんも一緒に遊んでいいかな？」と尋ねると、「もう５年生だし一人で遊べるから･･･」とこちらを見ずに言った。拒否されているのかなと少し思ったけれど、そこまでこたえはしなかった。私が＜お姉さんも一緒に遊んでもいい？＞と聞くと、「うん」とあっさり答えた。Ｂ君はいろんな話をしながらミニカーで遊んでいた。そのときインパクトがあった話が、「ひかるげんじが･･･」とつぶやきはじめたときの話で、急にその名前が出てきたので気になって、耳を澄ませて聞いていると、「ひかるげんじが麻薬で警察に捕まった」と言っていた。私はよくそんなニュース知っているなあと思い、＜ひかるげんじ知ってるの？＞と聞くと「うん」と答えた。「芸能人なのにそんな悪いことをしたらいけない」と言っていた。その後少しして、ミニカーから何か別の遊びをしようとしたときに、「この遊びは悪いことじゃないからしてもいい。」とさっきの話と比べていて、ここでそれと比べることが変な感じがした。大きいP.R.に移動してからは、すべり台やトランポリンなどP.R.にある一通りのものをちょっとずつやった後に、ゲームスタジアム（将棋、オセロなど17種類ほどのボードゲームができるもの）にとても興味を示して、中でもビリヤードとボーリングに興味があるようだった。それから、Ｂ君が門のようなものを大きな積み木で作った（図２）。私はＢ君が作るのをそばで見ていた。時間になったけれど、「あと10分」ともっと遊びたいようだった。帰りはお母さんに促されて「ありがとうございました」と挨拶をした。そしてＢ君が「これでいいんでしょ？」とお母さんに言った。私のいるところでそれを言うことで私にどういうふうに思われるのかわからずに言っているようだった。

＃２では、人生ゲームをした。ルールはだいたいわかっているようだったけれど、ラッキーカード持っていたら、お金をもらえるところだけど、ラッキーカードを持っていなくてもお金をもらっていて、言おうか、言わないか迷ったけれど、私が＜こっちじゃない？＞とお金を払う方を指さしてみた。Ｂ君は「そうかな？」と言っていたけれど、払う方に従った。ゲーム中、何かのときに、「そんなの関係ない」とＢ君が言ったので、私が身振り付きで小島よしおのまねをすると、ニヤッとして「小島よしおじゃないんだから」と私に突っ込んだ。Ｂ君と繋がれた感じがして嬉しい気持ちになった。

＃３では、大きな積み木でお家づくりをした（図３）。Ｂ君はトランポリンの上に作り始めて、私はどうしてわざわざ不安定なところに作るんだろうと不思議に思っていたが、Ｂ君の作り方を尊重して見ていた。Ｂ君は「自分で作るから」と言い、私とは一緒に作りたくないようだった。でも何かやりたいなと思ったので、Ｂ君に積み木を渡す係をした。ビリヤードでは、最初はルール通りやっていたけれど、途中から好きなところに球を

動かしてするようになった。私はどうやってどういう気持ちで遊んだらいいのかとか、そのとまどった気持ちのままビリヤードを続けた。Ｂ君が四輪車に乗ったので、私がそれを引っ張ってあげようとすると、「自分でやる」と、私が持とうとした部分をＢ君が持った。誰かに引っ張ってもらわないと動かないから、そこをＢ君が持っても動かないけどなぁとその光景が滑稽だった。帰り際、「ここには６年生になっても来れるし、中学生になってもずっと来れるから」と話していた。ここに来たい気持ちが強いんだなと安心するような嬉しい気持ちになった。

＃４のお城づくり（図４）では、また「自分で作るから」Ｂ君。私は立って見ていたが、何かしたいなという気持ちがあり、少しウロッとしていると、Ｂ君が手を出されるんじゃないかと感じでいるようだったので、座って見ることにした。するとＢ君は落ち着いて作っていた。作り終わったら交替で家に入った。作った家に私が入ることも拒否されるんじゃないかと思っていたけれど、私を入れてくれてとても嬉しかった。ゲームスタジアムをするか人生ゲームをするかでＢ君が迷う。「じゃんけんで決めよう」とＢ君。じゃんけんで決めるということは、私が決めることができる確率が半分あるということで、私にも選ばせてくれることがとても意外だった。私が勝ち、人生ゲームを選んだ。「いいね～」と張り切るＢ君。人生ゲームでは、Ｂ君の人生ゲームの遊び方で一緒に遊ぶことを心がけた。人生ゲームのルールから外れていることが結構あって、自分に不利有利関係なくそうしていたので、人生ゲームのルールで遊ぶにはまだ難しいところがあるんだなと理解できた。だけど、Ｂ君のルールというか楽しみ方についていくことがなかなか難しく、正直遊びながら私はとても混乱していた。

＃６でのたまのりのときは、お互いおなかの底から大笑いした。私も本当に面白くって大うけしていた。初めてＢ君とどんぴしゃりで繋がれた遊びだった。

＃７では、終わりの時間になっても、帰るのをしぶっている様子で、なかなか部屋から出ようとしない。「冬休みになったら毎日来れるからね」とＢ君。私は冬休みに帰省するのでその期間は遊べないことを伝えると、あっさり「いいよ」と気にしていないように言うが、＜せっかく冬休み来れるの楽しみにしていたのに悲しいね＞と言うと、「うん」と少ししんみりして言う。するとＢ君が「それじゃあ代わりの先生に来てもらったら遊べるんじゃない？」と言い、私は一気に悲しい気持ちになって、＜先生じゃなくて代わりの先生でもいいの？＞と聞くと、「うん。いいよ。そしたらここで遊べるから。誰かかわりの先生を探そう！」と明るく言う。＜代わりの先生はいないんだ＞と言うと、「じゃあ一人で…ひとりで遊ぶのは大変だから…」＜（誰かと遊びたいとは思っているんだなと思いながら）一人では遊べない？＞「う～ん。タイマーセットする人がいない」と言う。私はタイマーをセットするためだけの人なのかなと思ってしまった。とまどったり、混乱したりすることも多いなかで、Ｂ君と少しずつ繋がれている感覚を持ち始めていたときだっただけに、とても悲しい気持ちになった。けれども、振り返ってみるとタイマーをセットする人として私を必要としてくれているんだとそんなに落ち込むことじゃないかもしれないと捉えなおすことができた。

＃12では、前回の人生ゲームの続きをすることになった。今日はずっと人生ゲームに夢中だった。「じゃあ僕からね」と始める。トロッコに乗るためにはランプを持っていなければいけないのだけれど、持っていなかったけれど場から魔法のランプを取ろうと探す。「ランプ？」と私も探そうとするとすぐに「大丈夫！」と強い口調で言うので、私は手を出しにくい気持ちになりＢ君が探すのを見ていた。火災保険を持っていけなければいけないところにも止まったが、「この場合は…」と言うので、なになに？と言う気持ちで、＜おっ？＞と言うと、何か言われると思ったのか、「大丈夫、大丈夫、大丈夫！失うって書いてあるけれど、火災保険を考えればいいわけよ。これで２万円もらえる」マスにはそんなことは書いていないけれどもらっていた。「念のため持っておこうね。先生も一つくらい持っておいた方がいいよ」と私にもダイナマイトを持っておくように言う。こんな調子がどんどんエスカレートしていき、Ｂ君が有利なかたちで最後まで進んでいった。私は、イライラするような気持ちと悲しい気持ちとどうしたら

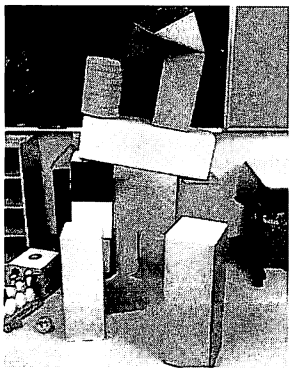

図２　Ｂ君が作った門のようなもの

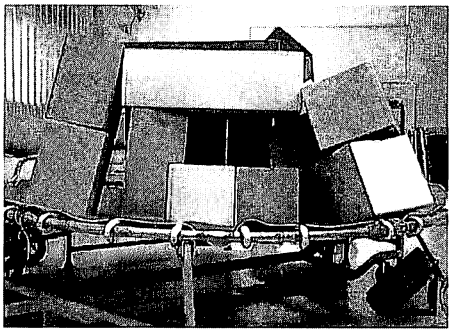

図３　Ｂ君が作ったお家

図４　Ｂ君が作ったお城

いいかわからない気持ちでいっぱいになってしまっていた。

第１期の母親からの聞き取り

12月：朝から不機嫌で学校に行きたがらなかったが、母親が「今日はP.R.に行くのもお休みだね」と言うとP.R.に行きたくて学校に行った。

２月：Ｂ君の家にゲームがあり、友達を呼んで一緒にやろうとするけれど、友達だけがやっていてＢ君はのけもの状態だった。ドッヂボールなどをしていても、Ｂ君が集中的に狙われ当てられたことや、「死ね」「消えろ」と言われたことなど、いじめられたことを母親に話す。

第２期　関係性が安定し、遊びを共有する他者として受け入れられる時期

（＃14～32　Ｙ＋１年３月26日～９月１日）

＃14では、お家を初めてトランポリンの上ではなく床の上に作った（図５）。「僕と先生の秘密基地」と言っていて、２人の秘密基地であることにとても嬉しい気持だった。最後にその秘密基地は、お化け屋敷へと変化した。

＃15ではたまのりのときに、２人で何かやりとりしながらたまのりができないかなと思って、たまのりをしながら持っていたボールをお互いにパスし合うというのをやってみた。Ｂ君に拒否されるかなあと思ったけれど、「先生いい遊び思いついたね」と私が提案した遊びを認めてもらえてとても嬉しい気持ちになった。こんなふうにちゃんと受け入れてくれたのは初めてだったかもしれない。

＃16ではP.R.に来ると、早速「先生外に行こう」とＢ君。「先生、春になっているよ。サクランボを取りに行こう」ととてもキラキラした目で言う。Ｂ君の目のキラキラを見て、サクランボを取りに行くというために外に行くことにした。ほかに遊びが移ったらP.R.に戻ることを提案しようと考えていた。サクランボ取りは、とてもワクワクしているのがＢ君から伝わってきた。高い木が多くて、Ｂ君が何かつつくものを探した。後ろに鉄パイプがあって、それで枝をゆすって落としていた。結構激しく鉄パイプをゆするので、見ている私はおっかなびっくりだったが、できるだけやらせてあげたいなという気持ちで見ていた。P.R.に戻ってからは、Ｂ君が家から持ってきたゴム当ての道具を使って遊んだ。段ボールで作った鉄砲に輪ゴムをくくって飛ばして遊んだ。黒板に標的となる敵をＢ君が書いて、そこに当てるということをやった。Ｂ君は輪ゴムを６つ持ってきていて、Ｂ君３つ、私に３つと半分ずつ分けていたのだけれど、私が打つ時に、輪ゴムを貸してくれた。私が＜いいの？＞とＢ君の分だから遠慮がちに聞くと、「いいよ。友達だったらそうするよ。」と言った。私はＢ君に友達として認めてもらえたんだととてもうれしい気持ちになった。

＃17では、野球の阪神VS中日と書いた点数表を作ってきて、野球の道具も持ってきてやる気満々だった。「外でやろう！」ということで、外の原っ

ぱでする。＃18、19と外での野球が続く。＃19では、＜P.R.で野球やってみない？＞との誘いに、「中でも外でもどっちもやろう」と言ったので、前半は中で、後半は外でやった。一回外での野球を味わっているだけに、室内では物足りなさそうだった。＃20では「自然と遊ぼうをやろう」とB君が提案する。＜5分だけね＞ということで外に向かう。探検したり、茂みに入って、お花取り競争をしたりした。B君はとても生き生きとしていたが、私は5分過ぎても戻れなさそうで、どこまでも行ってしまいそうなB君の様子にどうしたらいいんだろうかという気持ちでいっぱいになっていたけれど、楽しもうという気持ちを取り戻そうと努力した。摘んだ花はまとめて私にプレゼントしてくれた。B君にこんな一面もあるんだなとすてきだなと思った。

＃22では、P.R.からお母さんのところに戻るときに、B君が部屋から出てすぐに「わっ!!」と私をおどかす。私は大げさに＜あぁ～びっくりした＞と言うと嬉しそうにB君は走っていきまた隠れたので、私は＜どこかな～～＞と言うと、クスクスと笑い声が聞こえてくる。ばればれさ加減がかわいらしいなと思いながら、知らないふりをして廊下を歩いて行くと、「わっ!!!」とまたおどかす。私がさらに大げさに＜あぁ～びっくりした～＞と目を丸くして胸に手を当てて言うと、とっても嬉しそうに走って行き、また私をおどろかした。本当はこういう遊びをたくさんしたいのかなと思った。

＃24では、野球の道具を持ってきていて早速外へ向かおうとしていたのだけれど、＜B君、中で宝探ししてからにしない？＞と誘ってみた。「うん。いいね」と乗り気。15分間室内で遊んで、残りは外で野球をして遊んだ。1回の表で8－0でB君が勝って終わりとなる。B君が「先生暇だね。何する？」と聞いて来た。B君が私に聞いてくることに驚きながらも、私が提案した遊びやってくれるのかなぁと思いながら＜段ボールで何か作って遊ぶ？＞と言うと、「いいね～」とノリノリで、私はとても嬉しい気持ちになった。B君はダンボールでとても上手に銃を作った。そしてそれを持ち帰った。「行ってきま～す」と部屋を出るB君。私も＜行ってらっしゃ～い＞と返した。

＃26では、外で野球をした。B君がキャッチャーがいないけど、振り逃げをすることを思いついて、振り逃げをした。最初は面白くて私は笑っていたが、途中から、気づいた時には悲しいような気持ちと、イライラした気持ちと、遊びを放棄したくなるような気持ちになってしまっていた。振り逃げで7点も取られ、頑張って走って行ってタッチをしてもセーフと言われてしまっていた。私が攻撃のときには、4点取ったけれど、全部デッドボールで得点が入り、一生懸命走って、3塁でストップしたのにもかかわらず、B君がホームベースにタッチして「アウト!!」と言う。私が＜3塁でストップしたからセーフじゃない？＞と言うが、「アウト」だと言う。私はこれを受け入れたら、もう自分は泣くだろうなと思った。もう限界だと思い、＜3塁でストップ！＞と言うが、「ホームベースにタッチしてるよ」と言う。もう1回＜ストッーープ!!＞と言うが「アウト～!!」と返ってくる。それでもまた私が、＜ストップ!!＞と言うと、B君が大きな声で「スリーベース!!」と言い、ジャッジがひっくり返った。今思うと、やっぱり野球のルールが私のなかにあってそのルールに沿った楽しみ方で遊んでいるからこんな気持ちになったのだと思う。だけど、私の言い分が、こういう状況の中でB君に通じたことはとても意味のあることだったように思う。

B君がゲゲゲの鬼太郎の歌のメロディーに合わせて即興で歌を作って歌う。覚えている限りではこんな感じの内容の歌だった。

ゲ・ゲ・ゲゲゲのゲ～　毎日学校楽しくない　なんでだろ×2　なんで楽しくない　勉強楽しくない
ゲ・ゲ・ゲゲゲのゲ～　宿題多すぎる　楽しくない×2　宿題は～　毎日遊びたい
ゲ・ゲ・ゲゲゲのゲ～　D町は楽しいよ　なにがある×2　D町には～　ゴルフ場ひとつだけ

「勉強したくないのに。B勉強嫌いなのに。遊びたいのに」と強い口調で言っていた。他にも地獄という言葉を使って“日常が地獄だ”という内容の歌も歌っていた。

＃27。いつもの原っぱに行って野球をする。今日も振り逃げをしていたけれど、私がそれに対してあまりリアクションを取らなかったからか、前回よりやらなかった。前回私は振り逃げをしてい

るときに最初とても面白くて笑ったりしていたから、それで先生楽しいんだと思ってＢ君はたくさんやったのかもしれないと思った。

今日は初めて銃以外に、Ｂ君がナイフを作ったのだけれど、そのナイフが本物のようでびっくりした。１分くらいで作り上げてしまうからすごい。Ｂ君がいかにも狙っていますという感じで、私に銃やナイフ（図６）を向けてくるので、私がおびえるふりをすると、「大丈夫。大丈夫。本物じゃないんだから」と私を安心させるように言う。学校でも作った銃を持って行っているようで、学校でも銃を撃ったりするよう。その後に、「いじめられたら教頭先生の所に行けばいい」と言っていて、これがＢ君の現実的な対処法なんだろうなと思った。ダンボールで作った銃でも持っていかないと、Ｂ君にとって学校は怖いのかもしれないと思った。

＃28では、いつも遅れてくることが多いけれど時間ぴったりに来た。はりきっている様子で、はにかむような笑顔。P.R.に入ると早速ゴム鉄砲づくりをする。私はゴムを探しにお母さんの待っている部屋に行った。私がゴムを探していると、お母さんがＢ君のことについて私に話をし始めてそこから５分～10分くらい話し込んでしまった。途中でＢ君のところに戻らなければと思ったけれど、結局Ｂ君が迎えに来るまで話をしてしまった。とても悪いことをしたなあと思った。＜遅くなってごめんね＞と言うと、「遅くなるのはいいんだけど･･･」と言った。大きいP.R.に戻ると、Ｂ君が的を作って用意していて、テーブルの上にきれいに並べられていた。的にはそれぞれ絵が描かれていた。私はそのきれいに並べられたＢ君の作った的を見て感動し＜すご～い!!＞と言った。Ｂ君は誇らしげで嬉しそうだった。１回目はどちらも外れた。「お祭りみたいだね」というようなことを言って何かを準備し始める。わなげコーナーを作っていた。お祭りで風船ダーツ屋を開きたいことや風船をたくさん飾ったら人がたくさん来るかもと言っていた。

＃29では、風船が入っている袋に気がつき、「何これ？」と袋を取って見る。＜風船だよ。この間風船ダーツやりたいって言っていたから＞と言うが、「そんなこと言っている場合じゃないよ。」と注意するように言う。今日は野球をやる気満々のようだった。何の遊びをしているときだったか忘れてしまったのだけれど、Ｂ君がいきなり「天国」とつぶやくように言ったので、私はびっくりして＜ここのこと天国って言っているの？＞と尋ねると、「遊びの天国と言ってもいい」とＢ君が言った。画びょうを使って風船ダーツをしたのだけれど、「あんまりまっすぐ飛ばない」と本物のダーツを買ってくると言う。千円ちょっとしかないお小遣いで買ってくると言うので、承諾する。

＃30では、はりきってダーツと風船を買って持ってきて、ダーツで一緒に遊んだ。私は風船を膨らます係で、Ｂ君は風船を段ボールにつけるかかりをした。その時いろいろとおしゃべりをしたのだけれど、Ｂ君が「祭りでさ、風船ダーツ先生と一緒にやる？」と聞いてきた。私はなんて言ったらいいだろうと思いながらも、＜ねぇ＞と言った。するとすぐに「よし！だったら売る？」と言う。できないよなぁと思いながらも、その話を聞いていた。「だったら先生、先生も一緒に開く？」と一緒にやるかどうかをはっきり聞きたいようだっ

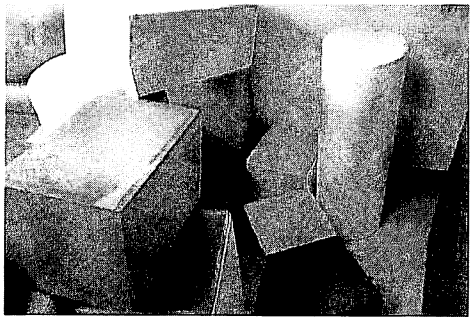

図５　２人の秘密基地

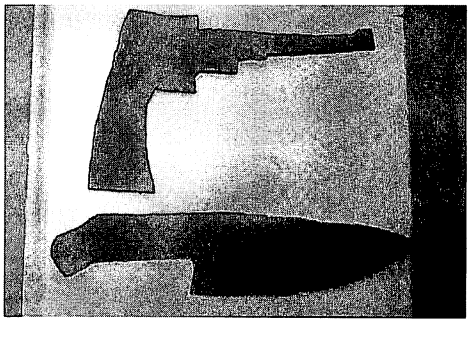

図６　Ｂ君が作った銃やナイフ

た。「もし先生、お金が入ったら半分ずつしようか」と提案していた。一緒にやりたいという強い気持ちが伝わってきた。「毎週月曜日開こうか！」と言う。私はできるかできないかではなく、Ｂ君がお祭りをしたい気持ちに目を向けて＜Ｂ君お店開きたいんだね。風船ダーツ屋さんでね。お金儲けてね＞と言うと、「そう！」「お金儲けたら、大阪旅行に行く」と言う。＜大阪旅行に行ったらなにするの？＞「阪神グッツを買いまくり」と夢を語り、その後は「一緒に開く？」と聞くことはなくＢ君は満足したようだった。

第２期の母親・担任の先生から聞き取り

４月～６月頃：居残り勉強をしている仲良しの友達を待つことがたびたびあった。

７月：学校で交流学級先の特定の児童数人（中心となっているのがＥ君）からいじめられている。嫌なことがあると、「死にたい」と投げやりになる。

第３期　地獄の世界を表現し、共有する時期

（＃33～37　Ｙ＋１年９月８日～12月１日）

＃33ではＢ君が紅白スポーツ大会と称して風船に紙ふぶきを入れてダーツをしたのだけれど、途中から「自殺」と言って風船を割り始めた。そのとき「容疑者が自殺」とつぶやくように言っていて、それに影響を受けたのだなと思った。「冗談、冗談」とも言うけれど、「自殺します」と言って、Ｂ君が自殺するかのようなその言い方や雰囲気に、なんだか重たい空気が感じられる。私はどう受け止めたらいいかわからず、どう言葉をかけていいかもわからずただ見守るしかなかった。この“自殺”を皮切りに地獄の世界を体験していくこととなった。＃34では、早速「先生、爆発成功させるのにいいアイデア考えました」「水風船を作って、自殺させよう」と張り切っている。水風船を天井から吊るして、私がその真下に立ち、私が失敗したら、水風船を割って、水が頭に落ちるということを話していた。黒ひげ危機一髪では最初は２人でやっていたけれど、３回目位から私だけで進めていくことになる。成功したけれど、また刺す剣を私に渡して来た。成功させてはくれないんだ、怖い体験をさせたいんだと思った。Ｂ君が「本当に地獄があったらどうする？先生だったら行く？」と聞いた。＜地獄に行きたくないね＞と怖そうに言うと、「だから、頭使って考えるっていうわけ。頑張ればいいってわけ」「みんな頭使ってるのに」と強い口調で言った。＃35でも風船自殺作戦をしたり、針の山を海賊の人形が歩いたり、地獄の世界を体験させたいようだった。そんな中、Ｂ君がハトを出すマジックをした。Ｂ君が作ったハト（図７）はとても上手ですてきな白いハトだった。ハトは平和の象徴だと気づき、地獄の世界が続く中だったけれど、平和の兆しが感じられた。その後は戦争ごっこをした。Ｂ君は段ボールの盾で私は新聞紙の盾で、Ｂ君だけがおもちゃの剣を投げて攻撃していた。「先生怖い？」と何度も聞いていた。だけど最後は私に「ダーツ投げていいよ」とＢ君が言うので、Ｂ君に当たらないように段ボールに向かって投げた。戦いが終わるとなんだか晴々したような気分だった。２人の共同作業のように感じた。＃36も来るなり「先生今日もサバイバルだよ」と地獄の世界をたくさん味わった。野球をやったときには、Ｂ君が思っている通りのところに私がボールを投げないと、わざと速い球をぶつけてくることがあって、とても悲しい気持ちになった。P.R.から出るとき「先生楽しかった？」とＢ君が聞いた。私は正直に＜先生Ｂ君にボール当てられて悲しかった＞と言ったが、Ｂ君はその話を聞いていなかったかのように別の話をした。＃37では、お祭りなどでよくある水風船のヨーヨーを持参して来た。この日のために自分のお小遣いで買ってきたと言う。水風船を膨らませる道具や釣る道具もあって本格的だった。水風船のヨーヨーは色とりどりでお祭りの楽しい雰囲気を感じさせた。けれど、ヨーヨーをどっちが多く取れるかと

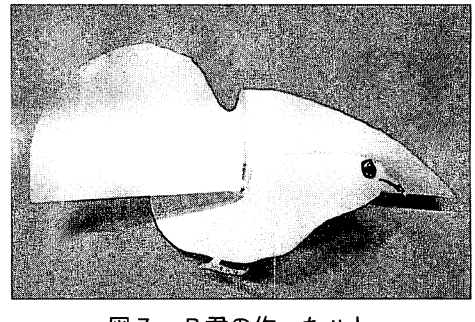

図７　Ｂ君の作ったハト

いう競争になったくらいのときから、「先生負けたら地獄だよ」と言ったり、「首ちょん」と言ってヨーヨーを床に落としたり、少しずつ地獄の世界の方に進んでいるように感じた。そして、ダーツ地獄を私に見せつけるようにやり始めて、「先生怖い？」「ダーツが落ちてきたらどうする？」と聞いた。だけど針の山を一緒に飛び越えたり、海賊の的にダーツを当てるのを一緒にやったり私にだけ怖い体験をさせるのではなく、今日はＢ君も一緒にやっていたのが少し違うところだなと思った。そして、Ｂ君が段ボールを盾にしてその中で身をかがめ、私に「先生ダーツ投げて」と言った。私は今までそんなことしたことがなかったから一瞬戸惑ってしまったけれど、要求通りに段ボールにダーツを投げた。まだクリスマスまでは20日以上あったが、Ｂ君が私にクリスマスプレゼントを画用紙で３つ作ってくれた。2009年という文字が書かれた腕輪と2009年と書かれた七夕の飾りとクリスマスカードにも年賀状にもなるカードをくれた。帰りたくなさそうで名残惜しそうな様子に、私は今までで一番別れることをさみしく感じていた。

第３時期の母親、担任の先生からの聞き取り

９月：給食時間、交流学級先の友だちとトラブルになり、給食の残飯をかけられる。

10月：交流学級先の友だちとトラブルになり、蹴られて床に頭を打つ。去年よりもいいことは加害者じゃないこと。

(4)　事例２の考察

第１期＃１での最初の言葉が「一人で遊べる」という発言であったため、筆者は無意識に一歩引いて関わりを始める。Ｂ君が他者と遊びを共有してくることができなかった根深さが現れた発言であるように思われた。Ｂ君にとって筆者が遊びを共有したい他者になったとはっきりと感じられたのは、第２期＃14で「僕と先生の秘密基地」と言って初めてトランポリンの上ではなく床の上に家を作ったときであった。今まで家を作るときに「自分でやるから」と筆者が作ることを拒否していたＢ君が、２人の秘密基地を作ったということはこれからここで一緒にやっていこうというメッセージの込められた家であると思われた。そして、トランポリンという不安定な土台から、安定した床に家を作ったということからは、筆者とＢ君の関係性の安定を表しているように思われた。そして第２期＃16からは一度も家づくりをすることはなく、遊びに広がりがみられた。第２期＃14で筆者が遊びを共有したい他者になったように思われた。Ｂ君と安定した関係を作るためにこれだけの時間を必要としたのは、自閉的傾向のあるＢ君の対人関係を築くことの難しさ、共有することに難しさがあったからだと思われた。Ｂ君に他者と遊びを共有したい気持ちはあっても、他者と遊びを共有できるルールの基盤がないために、ルールを伴う遊びを共有するときにどちらか一方は楽しくないという状況が生まれてしまう。

筆者が遊びを共有したい他者として受け入れられたことで重要だった点は、＃13で筆者からＢ君に対して積極的な関わりを持とうと工夫したことが一つの大きなきっかけであったように思われた。＃12で人生ゲームをしたときにＢ君は自分のルールでどんどん進めていき、筆者はいなくてもいてもよいのではないかと思ってしまい、途中からＢ君の提案に対して何も言わなかった。しかし、Ｂ君は「先生見て」「先生いいアイデアでしょ？」と筆者を必要としているということがわかり、＃13で積極的な関わりを工夫することとなった。筆者が積極的にＢ君のルールを共有しようとしたことが、Ｂ君にも伝わったように感じられた。そして帰り際に、Ｂ君が一緒にカヌー大会に参加しようという提案をし、共有したい他者の芽生えといえるような発言がみられた。

第２期＃16では、Ｂ君が「友達だったらそうする」と筆者にゴム鉄砲のゴムを貸してくれたり、P.R.から移動するときにいつもは筆者を置いてすたすたと言ってしまうのに「先生は一緒に行かないの？」と不安そうに聞いたり、筆者との関係性の繋がりを感じさせる出来事が多くあり、筆者に対するK君の気持ちが感じられ、筆者も安心してＢ君に関わることができた。

２人で楽しさを共有することができた遊びは安定して持つことができず、暗中模索の中偶然２人で楽しめた遊びが現れると言った感じであった。ルールの伴う遊びではお互いが楽しむことが難し

かったが、たまのりや旗挙げなど感覚的な遊びは楽しむことができた。

遊びが不安定なこともＢ君の特徴だった。人生ゲームが宝探しになったり、秘密基地がお化け屋敷になったり、お祭りが地獄になったり、楽しい遊びが怖い遊びに変わることが多く、筆者を不安な気持ちにさせた。楽しい遊びから怖い遊びへの変化には、どのような意味があったのかと考えたとき、Ｂ君の生きている世界がそのような世界なのではないかと思った。いつ楽しく遊べて、いつ楽しく遊べないのか、気づいたら怖い目に遭っているとか、怒られているとか、そういう毎日なのではないかと思われた。

第３期は、給食時間に残飯をかけられたり、蹴られて床に頭を打つなどの学校でのトラブルという外的な要因がP.R.の遊びや関わりにおいても大きく影響を及ぼした時期であると思われた。＃34からは筆者だけに地獄の世界を体験させたいようであった。Ｂ君が体験している地獄を筆者にも体験させることが重要であったと思われた。＃37では、針の山を一緒に飛び越えたり、筆者にだけ怖い体験をさせるのではなくＢ君も一緒にする。そして、Ｂ君が段ボールを盾にして身をかがめ「ダーツを投げて」と要求する。Ｂ君が攻撃されても守ることができる自分をP.R.で鍛えているようであった。また、2009年という腕輪や2009年と書かれた七夕の飾りは、2009年も筆者と繋がっていたいという願いの込められたプレゼントであると思われた。

４．総合考察

事例１と事例２の共通点として、人に接するときの態度が共通していた。人が人に接するときには２つの態度があり、一つ目は自分の思い通りに他者を動かそうとすること（自分の思い通りに相手を動かしたい）、二つ目は相手の思いを受け止めて、それに応じることである（鯨岡、2005）。

表１　事例１と事例２の変容過程

事例１の変容過程	＃	事例２の変容過程
第１期 ・遊びを共有するする他者として受け入れられ遊びに夢中になる時期 （＃1～13　Ｘ年７月26日～11月２日）	1	第１期 ・関係性が不安定な時期 （＃１～12　Ｙ年11月８日～Ｘ＋１年２月11日）
	2	
	3	
	4	
	5	
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
	11	
	12	
	13	第２期 ・関係性が安定し、遊びを共有する他者として受け入れられる時期 （＃13～32　Ｙ＋１年３月26日～10月７日）
第２期 ・攻撃的な面が多く出てくる時期 （＃14～18　Ｘ年11月７日～12月13日）	14	
	15	
	16	
	17	
	18	
第３期 ・２人の関係が深まりを見せる時期 （＃19～27　Ｘ年12月19日～Ｘ＋１年２月21日）	19	
	20	
	21	
	22	
	23	

	24	
	25	
	26	
	27	
第４期 ・P.R.以外の場でも関係性を必要とする時期 （#28～35　X＋１年３月１日～５月９日）	28	
	29	
	30	
	31	
	32	
	33	第３期 ・地獄の世界を表現し、共有する時期 （#33～37　Y＋１年10月13日～12月１日）
	34	
	35	
第５期 ・関係性を支えに苦手なことに挑戦する時期 （#36～41　X＋１年５月16日～６月17日）	36	
	37	
	38	
	39	
	40	
	41	
第６期 ・苦しい胸のうちを話す時期 （#42～45　X＋１年６月24日～７月24日）	42	
	43	
	44	
	45	

事例１も事例２も前者の態度であった。

事例１の場合、遊びのルールが基盤にあり、そのことが関係を作るためにプラスに働いていたが、事例２の場合は人生ゲームや野球などのルールの伴う遊びを共有することが難しく、そのことが信頼関係を作ること、安定した関係を作ることにも難しさを及ぼした。事例１は第１期＃１でＡ君が最も得意としている卓球を一緒楽しんだことをきっかけに、＃２の段階で筆者がＡ君にとって遊びを共有したい他者となっているが、一方で事例2は、第１期＃１での最初の発言が「一人で遊べる」であったため、筆者は無意識に一歩引いて関わりを始める。他者と共にあるというところからの難しさが感じられた。Ｂ君にとって筆者が遊びを共有したい他者になったとはっきりと感じられたのは、第２期＃14で「僕と先生の秘密基地」と言って初めてトランポリンの上ではなく床の上に家を作ったときであった。Ａ君は第1期＃２で筆者が遊びを共有したい他者として受け入れられたことがうかがえるが、Ｂ君は第２期＃１４でやっと筆者が遊びを共有したい他者になったように思われた。

５．引用文献

浜田寿美男（1997）：今ここに生きる子ども　ありのままを生きる　岩波書店

浜田寿美男（2006）：発達障害の本来はどこにあるのか　教育と医学

石川　道子　辻井正次　杉山登志郎（2002）：可能性のある子どもたちの医学と心理学　子どもの発達が気になる親と保育士・教師のためにブレーン出版

伊藤美奈子（2006）：朝倉心理学講座16　思春期・青年期臨床心理学　朝倉書店

小林　隆児　鯨岡峻（2005）：自閉症の関係発達臨床　日本評論社

小林　隆児　大久保久美代（2007）：関係性を通して進める発達障碍児の理解　臨床心理学　第７巻第３号　324－328

村瀬嘉代子（2006）：特別支援教育におけるカウンセリング・マインド―軽度発達障害児への理解と対応―　精神療法　第32巻第１号　10－17

山上　雅子　浜田寿美男（2003）：ひととひとをつなぐもの　ミネルヴァ書房